

# 勇魚 ISANA

Nov. 2001 No.25

## 目次

- 人類は地球のガン細胞？ . . . 1  
野島孝夫  
海棲哺乳類研究所
- アメリカ人の反捕鯨的立場：  
そこには何があるのか？ . . . 4  
丹野 大  
青森公立大学経営経済学部助教授
- 日本列島の西岸にもコククジラの回遊路があった . . . 6  
パク・クビョン  
釜慶大学校名誉教授
- 偽善は究極の贅沢 . . . 9  
モーガン・バーンビー  
生物学者

# 人類は地球のガン細胞？

野 島 孝 夫

海棲哺乳類研究所

現在先進国と呼ばれている国々にとって、捕鯨は長い間、重要な産業の一つであった。また、哺乳類の中で特異な位置を占める鯨類は、博物学者の関心の的でもあった。その研究成果は、ヒトを含む哺乳類の比較研究に重要な資料となっている。

しかし近年、まだ殆ど解明されていない鯨類の知能を一部の学者が高く評価して以来、捕鯨を罪悪視する風潮が欧米で強まった。さらに、エコロジーの啓蒙によって、野生動物保護の運動も活発になった。科学的な調査が不十分なうちに継続された捕鯨は、確かに鯨類の資源に重大な影響を与え、生態系にも少なからぬ影響を及ぼしたであろうことは想像できる。

反捕鯨の主張の一つ、鯨は知能の高い動物である、という意見を定着させた一人にジョン・C・リリー氏がいる。神経科医のリリー氏は神経生理学を研究していたが、イルカの研究を通してその優れたコミュニケーションを知り、さらに人類とイルカとの対話の可能性についても研究した。

映画化された『イルカの日』は、リリー氏がモデルになった作品で、人間と会話できるように訓練されたイルカを使い、ヨットの船底に爆弾を取り付けさせ、大統領を暗殺しようというものである。幸いにこの計画は失敗に終わっている。

映画の冒頭の記者会見のシーンで、テレル博士がイルカの素晴らしい感覚能力を説明した後、次のように話を続ける。「イルカには僅かながら敵もいる。サメ、バラクーダ、手当たり次第に乱獲する漁師、さらに不器用な科学者もそうだ。動物の頭脳を知る近道は、メスで切ることだと信じている連中」。

この最後の言葉は、解剖学を専攻した者としては抵抗がある。生物学の基礎は、その構造を調べることから始まる。長い歴史をもつ解剖学ではあるが、研究すべき事柄はまだ山積されている。

一方、機能を研究するのが生理学であるが、機能と形態は不可分の関係にあり、最新の方法論に基づく生理学的研究成果も、最終的にその機能の場である構造を再調査することにより確認されるのである。鯨の生物学的研究についても、多くの重要なデータは解剖によってもたらされてきた。捕獲調査の意義もここにある。

動物の知能の高さは、何を基準にしているのであろうか。よく議論されるのが脳重や体重に対する脳重比、そして、脳の表面に見られるシワ(脳溝)の状態

が問題にされる。シワが多ければ脳の表面を覆う大脳皮質内の面積と体積を飛躍的に増大させ、多くの神経細胞を配列させることができる。事実、多くの鯨類の脳は、確かにヒトよりシワが多い。また、大脳皮質内の神経細胞の分布密度もヒトと比べて遜色はない。

進化の過程で、神経系はその動物の生活を保証するに十分な発達を遂げてきた。仲間同士のコミュニケーションに関しても、群れで生活する陸棲哺乳類は、その手段を十分に発達させている。

イルカやクジラに高い知能を期待するのは、比較的大きな脳をもち、海という特殊な環境に適応した神秘性に基づく期待のように思われる。

現在の神経学は、一見相同あるいは相似に見える動物間の脳の形態から、その機能を推測できるまでには進歩していない。日進月歩の新しい技術を駆使しているが、ヒトの精神活動に関する研究も発展途中である。

動物の知能や精神活動に関する様々の憶測は、動物の行動や反応を見て、それが人間的であるか否かを感じる我々の思い込みによる事が多いのではなからうか。

人類を含めて全ての動物は、その生命を維持し、子孫を繁栄させてゆく為のエネルギーを有機質、即ち他の生命を摂取することによって得なければならない。それはすべての動物に等しく与えられた権利であり、また、捕食されるものの宿命でもある。動物は何を食べるかによって進化してきたと言っても過言ではない。そして、長い間の食癖は、人をして食文化を培わせてきた。

人類誕生以前の各地質年代に、自然は幾度となく生態系の破壊と再生を繰り返してきた。しかし、最も新参者の人類の爆発的な台頭によって、生態系のバランスは環境汚染と共に、直接的間接的に急速かつ重篤に破壊されてきた。これによって地球全体の生命が蒙った影響、あるいはこれから現れるであろう影響は、人類にとって脅威の一つとなっているガンに例えることができよう。人類はガン細胞に成り下がってはならない。主を死に至らしめれば、即ちガン細胞自体の死を意味するからである。

食物連鎖を含む生態系を健全、かつ永久的に持続させることは人類の重大な責任であり、それは取りも直さず人類の未来への保証である。ヒトも自然界に取り込まれている動物である。そのエネルギー源は野生動物からの恵みであっても、栽培や養殖から得られるものであっても、つまるところは地球上に注ぐ限られた量の太陽エネルギーに帰する自然の恵みである。野性生物と飼育・栽培された生物は、トータルの資源として考えなければならない。

要は、生殖による再生産可能な資源を減少させる事なく、許容範囲の中でいかに利用するかの問題である。

鯨類の資源を一定水準に持続管理できるというなら、さらに漁の現場での規

制の遵守と、これを監督するシステムが保証されるなら、クジラを捕ることを容認する。これは、鯨類を含む野生生物も資源として適性に利用することを是認する筆者の意見である。

## アメリカ人の反捕鯨的立場： そこには何があるのか？

丹野 大

青森公立大学

経営経済学部助教授

一般のアメリカ人が捕鯨についての知識が乏しいわりには、反捕鯨の立場を強くもっていること、さらにアメリカ合衆国が反捕鯨を代表する国であることは、つとにおなじみである。それ故にこの一見して理解しがたい点については、様々な人々により様々な議論がなされてきた。また様々な問いと回答も提示されてきた。だがそうした回答は、おおむね憶測の域をでるものではなかった。そこで私が所属する研究チーム（主席研究者：浜崎俊秀）では、これらの憶測的諸回答や諸議論をテストしてみることにした。そのために、1998年に一般のアメリカ人に「サンプル参加者（全米12の大学から448人）」として実際に研究に参加してもらい、アンケート質問状に回答してもらった。ここに、その彼らの回答を分析した結果から得られた発見の幾つかを報告させていただきたい。

まず、私達がテストしてみたいと願った主なる問いは、次の三点であった。第一に、「どのような要因が、アメリカ人を反捕鯨の立場に駆り立てるのか」。第二に、「アメリカ人の反捕鯨的立場は、しばしば指摘されるところの”日本叩き”の一形態であるのか」。第三に、「アメリカ人の反捕鯨的立場は、仮にそこに経済的利害が係わってきた時には、どのような反応をするのか」。次のようなことが分かってきた。

第一の問いについて。反捕鯨にかりたてる諸要因としては、これまで次のものが挙げられていた。「動物保護意識」、「捕鯨問題についてのアメリカ人の自民族中心主義」、「鯨の擬人化」等など。私達は、これらのものにさらに「マスメディアの影響もありうる」と考えてテストしてみた。分析結果は、マスメディアの影響はまずありえないことが分かった。むしろ指摘されてきたところの上記の三要因が、見事に影響してくることがわかった。つまり、与える影響の程度に差こそあれ、「動物保護意識を強くもつに従い、捕鯨問題についての自民族中心主義の考えを強くもつに従い、さらに、鯨を擬人化するに従い」、捕鯨反対の立場を強くもってくるということであった。

第二の問いについて。「アメリカ人の反捕鯨的立場は、日本叩きの一形態か」という問いをテストすることは、実は極めてむずかしい。何となれば、仮にアメリカ人に「あなたは、日本叩きのために、日本の捕鯨に反対をしているので

すか」等と尋ねても、「そのようなことは、ありません」という答えが返ってくるのが落ちだからである。そこで、捕鯨のことで知られている五つの民族（アイスランド人、グリーンランド人、ノルウェー人、合衆国イヌイット人、日本人）の捕鯨を、どの程度まで許容するのかという問いに置き代えて尋ねてみた。得られた許容順位は、（１）合衆国イヌイット人、（２）アイスランド人、（３）グリーンランド人、（４）ノルウェー人、（５）日本人、という具合になった。この順位は、参加者を男女別に分けた場合でも全く同じであった。日本人が最下位に置かれていることをもって、「反捕鯨は、日本叩きの一形態である」と主張することは出来難いであろう。だが、４４８人の回答者達がこれら五つの民族の捕鯨に反対する理由において、殆ど違いが無いだけに、「何故に日本人が最下位に置かれているのか」という疑問が払拭されないであろう。

第三の問いについて。この点は、しばしば指摘されるところの「Not-in-My-Backyard」症候群が、アメリカ人の反捕鯨にも絡んでくるものなのか」という問いでもある。「Not-in-My-Backyard」症候群とは、「（産業）廃棄物などによる環境への被害が他人のところに及んでいる分においては気にしないが、ことが我が身に降りかかるような場合には反対をする」といういわば「ご都合主義」である。勿論、アンケート質問状では、そのように尋ねることは出来ないで、「仮にあなたの知り合いが、鯨が魚を捕食することによって被害を受けるとした場合、魚よりも鯨を保護しますか」という質問で尋ねた。分析の結果は、「知り合いが被害を受けることを懸念すればする程、鯨の保護には難色をしめす」ということであった。これは、やはりアメリカ人の反捕鯨が、経済的利害が絡んでいない故の「ご都合主義」である、ことを示唆していよう。逆に又、一旦そこに経済的利害が絡んでくるような場合には、アメリカ人も鯨の保護には怯むかもしれないということでもある。

所詮、人間とは、希少資源をめぐる争うものである。これはやむを得ないことである。ただ、そのような資源をめぐる争いが起こった場合には、いかなる要因がさらに争いに影響を与えるものなのかを、単なる憶測ではなく経験主義的にテストしていきたいものである。それにより、よりよい解決方法が見つかるかもしれないからである。

## 日本列島の西岸にもコククジラの回遊路があった

### バク・クビヨン

釜慶大学校

名誉教授

コククジラの回遊路は、コククジラが低緯度海域の繁殖場と高緯度海域の索餌場との間を往復するルートである。東太平洋系統群（カリフォルニア系統群）のコククジラの回遊路は単線的で単純であるが、資源量においては遙かに劣勢であった西太平洋系統群（韓国系統群、アジア系統群）の過去の回遊路はやや複雑であった。西太平洋系の主流をなしていた狭義の韓国系が韓半島の東岸を経由してオホーツク海と南支那海との間を往復した回遊路と、日本列島の沿岸を経由して北上・南下回遊をした日本系の回遊路があった。後者の中で日本列島の東岸（太平洋側）にあった回遊路の存在は、考古学的な資料である市川のコククジラや、和歌山県と高知県の沿岸で江戸時代からコククジラを捕っていたことなどによって証明されているが、後述する古文献の記録によっても証明される。旧ソ連の A.G.トミリンは、かつてカムチャッカ半島の東岸あたりに分布したコククジラを西太平洋系に属するものと見たが、これは東岸系の索餌場が同海域にあったことを意味するものといえる。東岸系の繁殖場は瀬戸内海にあったという見解があるが、まだその確証はない。それが中国の南部海域にあった可能性が濃いと思う。この外に、日本列島の西岸、つまり日本海（東海）の西岸にももう一つの回遊路があった。この回遊路を往復していたコククジラは早くから捕鯨が盛んに行われていた山口県北岸や九州西岸で江戸時代から捕獲されていたにもかかわらず、その回遊路の存在は、従来見逃されてきたのみならず否定されてきた。しかし西岸にも回遊路が確かに存在したことが数種の文献資料によって確認できる。紙面関係で圧縮的に略述することにする。

まず 19 世紀の文献から見ると、1889 年刊行の藤川三溪、『捕鯨図識』には鯨道の説明の中に老漁の説を引用して、「長州地方ノ鯨八朝鮮海ノ鯨（中略）越前加賀ノ鯨八蝦夷地方ノ鯨長須兎鯨多シ。満州洋モ同シ（中略）千島八長須眞鯢兎鯨多シ。」さらに曰く、「紀州土州海八初冬二八座頭鯨長須兎鯨多シ（中略）越前ノ米脇浦長須兎鯨鯨多シ三月ヨリ五月二至ルヲ漁期トス」とある。東岸の和歌山県や高知県にコククジラが多かったが、西岸の石川県南部と福井県地方にもコククジラが多く来遊していたのである。千島にもコククジラが多かったということは、東岸系のコククジラが千島列島伝いに北上・南下していたことを物語るのではなからうか。

美島龍夫著の『捕鯨新論』（1899）には、捕鯨の時期および場所に関する説

明中に、「越前及び加賀の海岸には長須、兎鯨及び鰯鯨にして三月より五月に至る間に多し」と書いてあるのがみえる。イワシクジラについては不審な点があるが、越前・加賀地方にコククジラが来遊したということは、『捕鯨図識』の内容と一致する。

20世紀初頭に刊行された明石喜一、『本邦の諾威式捕鯨誌』(1910)には、コククジラについて、「日本では青鷲、赤鷲、白鷲の三種に区別している。加賀、能登、安房、紀州、土佐、肥前殊に朝鮮海に多く、十二月下旬から一月頃迄が尤も出盛りである」としている。信憑性の高い資料とみえるこの記録は、千葉県南部地方から高知県にかけてコククジラが回遊したとともに、西岸でも能登半島から九州の西北岸までコククジラが出現した事実を伝えている。最後に1925年刊行の中村正雄、『新潟県天産誌』(中野財団、新潟県庁)をみると、コククジラの回遊について、「海岸二三町二近寄ルコトアリシモ近年見ルコト稀ナリ」としている。記述は簡略であるが内容は具体的である。コククジラが陸からわずか2、3百余メートルの沿岸まで回遊して来たことがわかる。

以上の諸資料によって日本列島の西岸にも西岸系コククジラの回遊路があったことが立証されると思う。西岸系コククジラの繁殖場は中国沿岸にあったと推定されるが、その索餌場はオホーツク海にあった。西岸系コククジラは宗谷海峡を通じて同海へ入った。佐藤隆は1900年に『大日本水産会報』第221号へ寄稿した「北海道捕鯨志」で、北海道にはコククジラがもっとも多く、至る所にその遊泳を見ざるは無しと述べ、さらにその移動について、3月下旬より6月下旬まで後志沿岸より漸次北見沿岸へ遊泳すると述べている。これによって、本州の西岸を北上回遊した西岸系コククジラは、3月下旬にまず北海道の西南岸に到達した後、宗谷海峡を通り抜けて同島の北部東岸へ移動(おそらく摂餌しながら)したことがわかる。1848年の春に日本海へ来航してセミクジラ漁を終えてオホーツク海へ転漁したアメリカの捕鯨船モクティズマ(Moctezuma)号の6月27日付航海日誌を見ると、同船は宗谷海峡を通過する途中で若干のコククジラを発見して、そのうちの1頭を捕獲したことが記入されている。このコククジラはオホーツク海への進入の途中にあった西岸系コククジラであったのにちがいがなかったと思う。因みにオホーツク海に面した北海道の東岸に早春頃にコククジラが出現しなかったことは、北上回遊する東岸系コククジラが根室海峡などを通じてオホーツク海に入るコースをとらず、カムチャッカ半島の東岸をめざして北上したことを暗示するのではないかと思う。

故大村秀雄博士は、西岸回遊路の不存在論を唱えた。その唯一の論拠として、過去伊根湾でコククジラが捕獲されたことがなかった事実をあげている。同湾では江戸時代から捕鯨が行われ、1656年から258年間にわたる鯨種別捕鯨



統計も完備されているが、その統計にはコククジラは 1 頭も載っていないことを指摘して、したがってコククジラは西岸は通らなかったというのである。では山口県北岸と九州西岸でとれていたコククジラはどこからやってきたものかが当然問題になるが、大村博士はそれを韓半島の東岸沿いに南下した韓国系(狭義)の一分派が対馬海峡を渡ってきたものと解した。本州の西岸を回遊するコククジラがいなかったというならば、それは韓国系の一部であったと解するしかなかったのである。伊根湾でコククジラが捕獲されなかった理由は別の研究課題である。

西太平洋系コククジラは、まだ絶滅してはいない。わずかながら回復されつつある兆しがみえるようである。何時か西岸系クジラ自身が西岸回遊路の存在を実証してくれる日がくることと信ずる。

## 偽善は究極の贅沢

### モーガン・バーンビー

生物学者

国際捕鯨委員会（IWC）の加盟国は、またもや不可能な事態を実現してしまった。群れを為して口をそろえ、両サイドの言い分を同時に発言したのである。

IWC は同一のルールを一括して適用することを拒否している。先住民が文化的理由により鯨類を捕獲し食用とすることは許容するのに、その一方で先住民文化以外の文化を持つ人々には同じことを許容することを拒否している。それは非常に不公平かつ非民主的に思える。アメリカ先住民やイヌイットには彼等の文化と伝統を継続するために捕獲を認めながら、一方アイスランドやノルウェーや日本のコミュニティの歴史は無視する。それは政治的な依怙鼻厩に類する行為である。今や食資源が先細りし、食糧コストが上昇し、世界の多くの地域で飢餓が発生しているというのに、海洋が人類に与える豊かな資源を無視するのは怠慢としか思えない。

鯨以外の動物を食資源として常用している人々にとっては不愉快と感ずるかも知れないが、一頭のミンク鯨からとれる食糧は、それぞれの先住民にとって飢えるか生存するかとの差をなすほどの量である。鯨の他に殆ど資源を持たない何千という人々へ継続的に生活支援を与えることは捕鯨産業以外にはできない。すでに数多くの国々が絶滅に瀕する鯨類には自発的に捕獲規制を行っている。それは、これらの国々が無秩序な商業捕鯨のもたらす結果について自覚し、配慮していることを示している。

IWC の加盟国はそもそも IWC という組織に関心をもつから加盟しているのである。IWC は、全ての加盟国が IWC の持つ使命の重要性を理解しているという事実を認識し、貴重な時間をもっと有効に費やすべきである。加盟国を疎外するような国際機関に成功は望めない。

我々は、ヒンズー教を信仰する地域の数えきれないほどの人々が、牛を殺すことで飢餓から救われるにもかかわらず、牛の捕殺を禁じていることを糾弾するものではない。それならば、なぜその一方で何十世代も受け継がれた伝統を守っているコミュニティを生存させようとする国々について非難することが理屈に合うといえるのか。自分の家族とコミュニティが生き長らえる為に食を求めめることは何人にとっても最優先されるべき事項である。

私自身、自然資源以外の食糧生産を求め、経済的自立を求める一人ではあるが、それでも、人間が自然資源を現実に利用することが出来なくなって被害を被ることに良心の呵責を覚える。私は、関係者すべての権利を守るには、何

らかの中間的線引きが必要であると信じている。

科学者として、私は、一頭の飼育されたシャチを自然に帰すために何百万ドルの資金が費やされながら不成功に終わるのを見た。それだけの金があれば、どれだけの人命が助けられたであろうか。それだけの金額が投資されたら、いくつの産業が立ち直れたであろうか。それだけの収入があれば、どれだけの食糧不足が補われたであろうか。

私は、人生の大半を地球上の広大な海洋とそこに棲む生物をより良く理解する為に費やしてきた。鯨とイルカの生活を理解しようとする研究は、実に魅惑的な時間を私に与えてくれた。だからといって、私は、一時たりとも彼等の生活が人類のそれよりも大切であるという価値判断をしたことはない。私は、生きとし生きるものの順位を理解し尊重する。私は、自分と同類の補食動物の肉を食べないことを選択するが、それは私とその選択をするという贅沢な自由を持っていることに他ならない。だからと言って、私は、この地球上の他の肉食動物が同じことを私に対して選択するとは考えていないし、またそれを期待してもない。

私は、自分が鯨肉を消費することは選択しないが、それは私が育った文化環境が鯨肉を通常の蛋白源としない文化であった為である。もし私が他の地域で生まれ育ったのであれば、私の食感覚も異なったものになっていたであろう。もし私が他の社会の人々に彼等の生活習慣を変えなさいというのであれば、まず彼等にその替わりとなる生活手段を示さなくては良心が許さない。その替わりとなる手段は彼等が生存を続け、そして、繁栄を保証するものであると同時に、彼等の文化や歴史に対するプライドを傷つけないものでなければならない。

IWC は、組織の成功のために、加盟国がお互いに尊敬し合うことが協力の基本条件であるということを想起しなければならない。